

【特色あるフロンティアスクールの取組事例】

都道府県番号	27
都道府県名	大阪府

(    )

・学校名及び規模

大阪市立大江小学校									
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	2	2	2	2	2	2	1	13	18
児童数	59	66	61	58	54	45	6	343	

・実践研究の概要（主題及び設定の趣旨）

<p>・主題</p> <p><b>自ら考え、自ら判断し、自ら行動する子どもの育成</b></p> <p>基礎・基本を身につけさせるための個に応じた算数指導のあり方</p> <p>・テーマ設定の趣旨</p> <p>子どもたちが生きていく21世紀は、変化の激しい先行き不透明な時代だと言われている。そこで、これから生きていく子どもたちに求められているのは、一人一人が自分らしさを発揮して、心豊かによりよく生きていく力である。そのためには課題をつかみ、自ら考え、自分なりに表現しながら解決していく力を子どもに身につけさせることが今学校教育に求められている。</p> <p>本校の子どもの実態として、指導者から提示された課題に対しては、意欲的に課題解決しようと努力する子が多いが、自分自身で課題を見つけ、見通しを持って自分なりの考え方で結果を導き出す力は十分ではない。また、結果にとらわれがちで、課題解決の過程で自分なりの解決の手だてを考え出す喜びを味わったり、学習したことを身近な生活場面で積極的に活用したりしていこうとする態度もまだ十分には育っていない。</p> <p>そこで、一人一人の子どもの実態をもとに個に応じた指導を充実させた授業実践を積み重ねていくことで、基礎・基本を身につけさせ、確実な学力の向上をめざしていきたいと上記の主題を設定し研究に取り組んだ。</p>
--

・実践研究の内容について

( ) 本校が考える算数科における基礎・基本

まず基礎とは、本時の学習課題を解決するために必要な知識・技能や考え方ととらえる。つまり、学習課題を解決するために必要な既習の学習内容である。次に基本とは、本時の学習を通して身につけられる知識・技能や考え方と認識している。言い換えれば本時の学習を通して身につけられる新しい知識・技能や考え方である。またこの基本は一般的に次の学習では課題解決のための基礎となる。

( ) 研究の視点

課題を明確に持たせるための問題場面設定の工夫

基礎・基本の定着と学力の向上をはかるための評価活動の工夫

( ) 問題解決を志向した学習過程の設定

児童の学習意欲を喚起し、児童一人一人のもてる力を最大限に発揮させながら、基礎・基本を身につけさせ、確かな学力の定着を図るようには、問題解決を志向した学習 指導を推進する必要がある。

そこで、1時間の基本的な学習過程として、「学習課題をつかむ」「見通しをもつ」「筋道を立てて考える」「学習内容を深める」の4つの学習段階を大切に授業を実践した。以下は、各学習段階において、指導上重視した点である。

**「学習課題をつかむ」段階において**

学習課題を自分のものとして受けとめ、課題解決への意欲が高まるような工夫をする。「おかしいなあ」「なぜだろう」「どうしたら調べられるかな」などに子どもに課題解決への欲求を促すような問題場面を設定する。また、子どもの身近にある生活場面から、算数の問題場面を設定し課題を見つけるようにする。

**「見通しをもつ」段階において**

既習の知識や自分の経験などから、結果の見通しと課題解決するための考え方や方法の見通しを、自分なりにもつことができるように工夫する。指導者は、見通しをもつための手がかりとなるポイントや関連する既習内容を想起させるような支援をする。

また、自分なりの見通しを持たせた上で、話し合いを通じた意見交流により、よりよい見通しに練り上げていくようにする。

**「筋道を立てて考える」段階において**

自力による解決

自分の立てた見通しをもとに既習の知識や、数学的な見方・考え方などを活かして自分で課題解決できるようにする。机間指導して個に応じた支援をしたり、また解決の方法を交流するために発表ボード等にまとめておくようにしたりする。

学び合う活動

解決の方法や考え方を交流し合うことで、いろいろな解決方法や考え方を共有したり、共によりよい解決方法に練り上げていけるような場を持つ。

**「学習内容を深める」段階において**

どんな根拠をもとにして、どのような考えの流れで課題解決したのか、その過程を振り返らせる。そして、自分の力で問題を解決できた成就感や達成感、本時に自分で解決したことが次の学習では新たな課題解決の手だてとしての知識や考え方として活用できる喜びを味わわせるようにする。

( ) 評価カードの作成・活用

評価カードの目的

本校では、「学習内容を深める」段階で、1時間の課題解決の流れをふり返らせ

るために、評価カードを作成・活用した。

評価カードを活用することにより、その時間の学習内容の基礎・基本に関する児童の評価を的確かつ容易に行うことができ、個に応じたきめ細かな指導も行えると考えた。

基本的に1時間の授業毎に評価カードを作成し、毎時間評価を行うことにより、個に応じたきめ細かな指導を行うことにした。

評価カードの構成

評価カードは次の3段階の評価問題で構成されている。

<p><b>ホップ</b>・・・本時の学習課題を解決するために必要な基礎を理解しているかを評価する問題</p> <p><b>ステップ</b>・・・本時の学習課題を解決したことで身につけられる基本を理解しているかを評価する問題</p> <p><b>ジャンプ</b>・・・発展的に取り組める問題。つまり、本時の学習を十分理解できた児童が、学習をより広めたり、深めたり、進めたりする問題</p>
--

本校の評価カードでは、ホップ・ステップの評価問題が解ければ、その児童は本時の学習内容を理解できたと評価できる。ジャンプの問題は、本時の学習内容を十分理解できた児童が取り組む発展的な問題と位置づけた。

評価カードの作成に関して

評価問題の作成に際しては、単元間の内容の関連等をもとに、何が本時の基礎・基本になるのかを十分考える必要がある。

また、できるだけ短時間で必要十分な評価ができるように、ホップ・ステップの評価問題はできるだけ問題内容を精選することも大切である。

ジャンプの問題は、今までの学習内容をもとに無理なく解くことができる内容になるように配慮する。

評価カードを使っての評価方法

ホップ・ステップに関しては、その授業時間内に、指導者が机間指導しながら、一人一人の評価を行う。その評価の結果、理解が十分でない児童に関しては個別の指導を行ったり補充的な問題をさせたりする。ホップ・ステップの評価問題が解けた児童は、ジャンプの問題に取り組むことにより、さらに学習を広げたり、深めたり、進めたりするようにする。

#### ( ) 成果と今後の課題

成果として以下の点が挙げられる。

問題解決を志向した4つの学習段階をもつことにより、明確に学習課題を持ち、見通しを持って意欲的に学習に取り組むことができた。

具体物・半具体物による操作活動を行わせたり、視覚的に捉えることができるような教材を使った問題場面の設定を行った結果、子どもが課題を明確に持ち、主体的に課題解決を進めることができた。

評価カードを活用することにより、それぞれの子どもの学習に対する評価ができ、理解が十分でない子どもには個別の指導を行うことができた。また、子どもにとっては励みになり、「分かった」という成就感を持たせることができた。

今後の課題としては、以下の点が挙げられる。

基礎を振り返らせる時間を十分取ったり、関連する学習を指導計画の中に弾力的に取り入れたりするなど基礎・基本のさらなる定着や個に応じた指導の充実に努める。

評価カードに関しては、算数科の4つの評価の観点、つまり関心意欲態度・数学的な考え方・表現処理・知識理解のうちどれを本時は重視するのかを十分考えた上で作成し、子どもが使いやすいように内容を工夫したり精選したりして、より効率的に活用できるように工夫する。

授業形態については一斉指導に加え、少人数指導、習熟度別の学習、チームティーチング的な指導など弾力的な指導方法の工夫をはかる。